

IP THRIVE

Academy

つくる力に、 未来をひらく鍵を。

そのアイデア、世界に出せる？
ビジネスへと踏み出す一步を、知財が支える。

未来を担う中高生・高専生による、
探究×知財×創造の学びの場。

アイデアを社会へ。
学生たちの挑戦が動き出す。
知財がつなぐ“学び”と“ビジネス”。



IP THRIVE Academy

未来を担う中高生・高専生による、
探究×知財×創造の学びの場。

[2025.10.5開催]

INPITは10月5日、大阪・関西万博にて「IP THRIVE Academy」と題し、未来を担う中高生・高専生が社会課題解決に向けたアイデアを披露するイベントを開催しました。本イベントの大きな特徴は、順位を決めるのではなく、一流の起業家メンター陣との対話を通じてアイデアを深める「学びの場」であることです。当日のプレゼンでは、その場にいる多くの学生や観覧者から質問や感想が寄せられ、発表者がそれに真っ直ぐ応えるなど、会場が一体となったインタラクティブで熱気あふれる時間となりました。

「参加チーム(学校)」

アイデア泥棒撲滅委員会

学校名 / 四天王寺中学校
発表テーマ / 知的財産権を保護する方法についての調査

Re:Ceipt(リシート)

学校名 / 大阪桐蔭高等学校
発表テーマ / レシートの再設計で広がる未来

KOSEN ROSE

学校名 / 大阪公立大学工業高等専門学校
発表テーマ / 女子高専生育成のためのSTEAM教育拠点 (ROSEミライラボ) の創設と実践

DOME

学校名 / 神山まると高専
発表テーマ / ただの寮DX化アプリが、全国の寮生の『寂しい』をなくそうとする挑戦

Mind Benders

学校名 / 四天王寺中学校
発表テーマ / 盗作に関する調査

すいすいくん

学校名 / 関西大学北陽高等学校
発表テーマ / 防災×家族の和 [輪]

万博チーム

学校名 / 神山まると高専
発表テーマ / 大阪・関西万博の徳島ブースの制作から次のステップへ

IdentiX(アイデンティクス)

学校名 / 大阪公立大学工業高等専門学校
発表テーマ / タンパク質危機を解決する～Worm Farmer～



INPIT理事長 / 近畿統括本部長
渡辺 治

▽万博ダイジェストはこちらから INPIT Channel
未来を創る10代の挑戦 | IP THRIVE「Academy」Digest (大阪・関西万博)





【PROFILE】神山まるごと高専一期生 / 全寮制の寮のDXアプリを開発、学校文化祭で1570人が使う決済アプリを作り300万円の取引を成功させる。地域での事業開発にも力を入れており、そんな活動に半年間密着したプロセスがテレビで放送された。



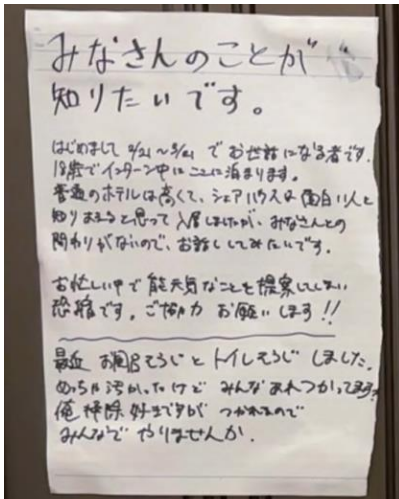
寮生活アプリ“DOME” という提案

神山まるごと高専のピッチは、会場の空気を一変させました。プレゼンしたのは、誰かの指示ではなく「自分たちが欲しいから」開発した、全寮制の不満を解決するアプリ「DOME」です。Tech担当の中本慧思さんとDesign担当の市川和くんがタッグを組み、美しいデザインと驚きの機能を実装。SwitchBotで洗濯機の稼働状況を確認したり、GPSで朝の点呼を完了させたりと生活をアップデートし、学内利用率は100%です。開発中の「DOMAP」機能では、Bluetoothで「誰かと話したい」気持ちと居場所を可視化し、メンタル面の課題にも踏み込んでいます。彼らの「当事者意識」と「作る力」は、来場した高校生を大興奮させ、アンケートでも大反響。「自分たちの技術で世界は変えられる」可能性を示した素晴らしいピッチでした。

いまの自分で立ち止まらない。
想像の先へと進化し続ける「作る力」

SATOSHI NAKAMOTO

中本慧思



アプリ開発以外にも、 新たな領域へ挑戦されている そうですね。

はい。ソフトウェアの枠を越え、未知のハードウェア領域にも挑んでいます。インターンでの活動に加え、ARグラスの制作や電動モビリティの開発にも挑戦したいと考えています。「今できること」に縛られず、自分の可能性を決めつけずに多様な経験を積んでいきたいです。

万博でのピッチや メンタリングを経て、 どんな気づきがありましたか？

「誰が価値を感じてくれるのか」という顧客視点を持つことができました。これまで「自分が作りたいもの」を形にしてきましたが、起業家からの助言で、ビジネスとして成立させるには「本当にお金を出してくれるのは誰か(保護者など)」を考慮することや自分のアイデアやこだわりを守る手段として、知財を意識することの必要性も知る機会になりました。

これから、どんな風に 「作る力」を発揮して いきたいですか？

純粋なワクワクを、社会を動かす価値に変えていきたいです。「自分がワクワクするものを作り、共感・納得してくれた方から対価をいただく」のが理想です。手段に固執せず、目の前の課題解決のために「作る力」を発揮し、枠を越えて社会に新たな価値を生み出し続け

最近入居した多国籍な シェアハウスでも、 独自の取り組みをしているとか？

面白い大人と話したくて入居したのに、誰もリビングにいない。「ならどうする?」と、即座に住人が自由にコメントできる交流用SNSを立ち上げました。アクセスしてもらうため、まずはアナログに玄関へ自己紹介の張り紙をしました。最初は無反応でしたが、「風呂掃除しました!」など自分からネタを作って発信し続けました。その結果、今ではアプリを通じて韓国から来た住人と食事に行くなど、リアルな交流が生まれました。デジタルに頼るだけでなく、時にはアナログな手段も組み合わせる大事さを実感しています。



-  自転車庫
-  外出届
-  外泊届
-  荷物届
-  欠食届
-  相乗り届
-  洗濯機
-  点呼

高専生が「社会とつながる」ための接点

【PROFILE】名前/中田 裕一(なかた ゆういち)。所属/大阪公立大学工業高等専門学校 総合システム学科/一般科目系(保健・体育)。役職校長補佐/地域連携テクノセンター長。経歴筑波大学大学院(体育研究科)修了。専門分野スポーツ哲学/運動学。現在の活動産官学連携(共育連携)/アントレプレナーシップ教育



YUICHI NAKATA

中田裕一

社会とつながる接点。未来を創る「知財」という授業。

大阪公立大学工業高等専門学校で、学生たちの指導にあたる中田裕一先生。圧倒的な技術力を持つ高専生たちが直面する「ビジネス化の壁」。そして、彼らが教室を飛び出し、社会とつながるために必要なものとは。万博イベントでの熱狂と、次世代教育の最前線で見つけた「知財」の新しい価値を紐解きます。

万博イベントに参加し、学生たちにどのような変化がありましたか？

第一線で活躍する「本気の大人」との出会いが、彼らを大きく変えました。最も大きかったのは、起業家である井本さんとの出会いです。学校ではどうしても「教員と学生」「評価する側・される側」という枠組みにはまりがちです。しかし、第一線で活躍する大人は彼らを子供扱いせず、一人の人間として「社会でどう共感を生むか」を真剣に問いかけてくれました。学校のリソースだけでは引き出せなかった圧倒的な成長を目の当たりにし、外部の力と連携することの重要性を痛感しました。





知財は専門的と感じる人も多いですが教育現場でどのように扱って良いのでしょうか？

高専のカリキュラムにも起業家マインドを醸成する科目が増えてきました。問題解決型授業としてチーム編成しビジネスプランを考える機会を提供しています。その中でINPITさんのご協力により、知財の制度や調査・検索する手法などをレクチャーいただきました。学生の目線や理解度に合わせた内容にアレンジいただき、少しずつですが関心も高まってきて感じています。これを継続することで知財が身近なものになることを期待しています。

これからの時代、高専の教育はどう変わっていくべきでしょうか？

教員自身が意識を変え、社会とつながる本気環境づくりが必要です。「社会とつながる」。この意味を理解して行動できなければ、これからの教育は時代に取り残されてしまいます。私たち教員自身も意識を変え、INPITや外部のプロフェッショナルと積極的に連携し、実装体験ができる環境を整える必要があります。優秀な若者たちが失敗を恐れずに挑戦し、未来の扉を自らひらける本気の教育現場を作っていきます。

学生が社会とつながるために、「知財」はどのような役割を果たすとお考えですか？

自分たちのアイデアの価値を知る「外の世界との接点」になります。知財を学び、意識することは、単なる権利の話ではありません。自分たちが生み出した技術が、すでに世の中にある特許なのかを調べる。もし類似のものがなければ「これは世界を変えるかもしれない」という自信に繋がりますし、似たものがあれば世の中のニーズを知る機会になります。また、先行する特許と比較することで自分たちの強みや差異に気づくヒントにもなります。自分たちのアイデアが社会全体の中でどう位置付けられるのかを測る「接点」として、知財は非常に重要なツールになるのです。



今の教育現場に対して、どのような課題感をお持ちだったのでしょか？

「作る力」を「社会に届ける力」へと昇華させる環境が不足していました。高専生たちは素晴らしい技術力を持っていますが、どれほど優れた技術やアイデアでも、社会に出して誰かに使ってもらえなければ意味がありません。自らのアイデアで新しい事業を立ち上げ、社会課題を解決できるような人材を育てたいと願う一方で、学校という閉ざされた環境だけではそれを教えきれないという強い危機感がありました。

